

平成30年度 重点目標と目標達成のための手立てと評価

A:達成できている B:おおむね達成できている C:達成が不十分である

岡山県立津山高等学校

経営計画番号	重点目標	目標達成のための手立て	中間評価	中間期の達成状況と後半に向けての対応	年度末評価	達成状況と次年度に向けての対応	総合評価
全体	IV1(1) IV2(1) IV4(1)(2)	SSH事業を通し、生徒の'Vision' 'Grit' 'Research Mind' を育成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究活動においては、担当者間でさらに情報交換をしながら、指導方法の改善を行いたい。今までと違い科学部専属の生徒が減り、放課後の活動に制約があるため、生徒にもグループ内の研究状況や計画の共有をもっと図っていききたい。 NS, MS, SSでは外部講師によるワークショップが順調に行っている。今後は海外研修の情報も取り入れながらさらに広い視野を共有させたい。 外部発表会・コンテストへの参加者は97名と昨年度とほぼ同じ(昨年同期96名)。計画的に声掛けをしながら参加者の増加を図りたい。一方で科学普及活動への参加者は112名となり年々増加している(昨年度同期94名、一昨年度同期91名)。要因としては3年次生の参加者が増加したためと思われる。その他には、今年で6年目となる美作サイエンスフェアの来場者数が過去最高となる結果であった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 科学系コンテストへの参加者は197名とほぼ例年通りの人数であった(H29:191人, H28:208人)。しかし、残念ながら入賞件数は9件と昨年度に比べ減少してしまった(H29:16件, H28:22件)。ここ数年は減少傾向にあるため、原因について分析を行いたい。 美作サイエンスフェアをはじめとする地域の様々な科学ボランティアに参加し、成果の発信と普及に努めた。参加者は過去最多人数(112名)となり運営も生徒主体で実施することができた。 NS, MS, SSでは年度初めの計画通り、外部講師によるワークショップ(2年次:各5回, 3年次:各2回)【資料①】と校外研修(2回)が順調に実施できた。さらに海外研修で用いた研修先の情報も活用しながら、さらに広い視野(Vision)や幅広い分野への興味関心(Research Mind)を共有させることができた。 次年度もSSH事業を通し、全生徒の'Vision' 'Grit' 'Research Mind' を育成するための指導について様々な場面で研究実践を行いたい。 	B
	III B 1 IV3(1) IV4(2)	全教員で教科指導力を高めあい、生徒の主体的、対話的で深い学びの実現につなげる。	B	<ul style="list-style-type: none"> 2020年度入試・新学習指導要領の実施を見据えた研究や、個々の授業改善への取り組みを、通信や研修を通して共有する。通信は年間10回以上発行する。 各教員が、年間で5回以上の授業見学(中学校の授業を含む)を行う。これを促進するために、授業研修週間を年2回設定する。研修は授業改善に関する項目のアンケートで評価する。 教科や科目ごとに、中学校と高校の教員同士がカリキュラム、授業、生徒などについて話し合える場を年間で4回以上設け、中高連携の強化に努める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 通信は現在までに9回発行しており、新テストと次期学習指導要領に向けた動きなどを発信し、授業改善に向けての視点を教員間で共有するよう努めている。 第1回授業研修週間終了後の授業参観回数の平均(入力者数)は3.3回である。昨年同期と比べるとやや増加している(+0.9)。第2回授業研修週間は1週間と短い。見学を促し授業改善に資する。 教科分析会等を活用し、中学校と高校の教員同士が情報共有を行っている。これらが6年間を見通した指導の在り方の改善等に寄与している。 	B
1年次団	III A 2 III A 3 IV 2 (1)	併設型中高一貫教育校の一員として自他共に認め合い、高め合える集団を育成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> 概ね時間を意識した行動ができるようになってきたが、依然向上の余地がある。年次教員団が共通理解を持って、その場で注意を促すなど、粘り強く指導している。 十六夜プロジェクト(iP)や授業を中心に、アクティブラーニングの手法で、生徒が互いに考えを述べ評価し合う環境づくりに取り組んでいる。今後のiPの授業で、課題解決能力や論理的表現力を伸ばす取組みを計画中である。 学校行事等では、できるだけ多くの生徒で役割分担をしている。生徒の個性が均等に活かされるよう、今後も継続していく。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 授業の開始・集会での集合など時間を意識した行動が出来るようになってきた。特に集団としての動きは向上が見られる。また、HRや年次全体の集団の多様性を認め受け入れる姿勢には成長が見られる。 iPのディベートでは、グループで1つの課題について、積極的な協働によって課題解決を図ろうとする姿勢が見られた。授業でもグループワークやペアワークで同様の姿勢が見られる。反面、集団を牽引するリーダーが十分育たなかった。集団で切磋琢磨する先頭に立つ人材育成が課題である。 読書の奨励については、朝読書において英語の本を用いた多読企画を実施できた。さらに、iP IIのグループ研究や理科の課題研究を進める上での参考資料としての書籍の活用も呼びかける。 	B
	III A 3 III B 1 IV 2 (1)	自立型学習者になるための基礎力を養成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> 担任会・学年会を通じ、教科担任とHR担任との連携を密にし、生徒に適切なアドバイスを行えるようにする。 「予習→授業→復習」のサイクルを定着させ、基本的学習習慣を確立する。 基礎的学習事項の定着確認を継続的にを行い、手厚く指導する。 家庭学習が目標時間(平日3時間・休日5時間)に達するよう、面談等を通じて指導する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学習習慣は定着しつつあり、平日の学習時間が9月168分→11月170分→1月175分、休日が240分→263分→279分と増えた。自立型学習者の基盤となる学習時間は、生徒個々においても意識が高まり、学習時間の増加につながった。一方で、目標達成者の割合は、平日47%→46%→45%、休日24%→42%→40%と推移している。学習時間の中上位がさらに学習時間を増やしている一方、なかなか学習に向き合えない生徒もいる。学習時間の二極化を解消し、全ての生徒が自分の目標に見合った努力ができるよう指導していく。【資料③】 学習に不安を抱えている生徒に対しては、担任をはじめとして教科からも面談を行い、また12月末にはセミナー形式で学習の定着に向けた取り組みができた。 	B
	III A 4 III B 1 IV 1 (1)	高い目標を掲げ、未来を切り拓こうとする集団を育成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> 年間5回以上のHR担任面談や教科面談で、生徒の心に灯を点ける面談や声かけを行う。 進路十六夜の発行、iPの活動、東京研修、ハイレベル模試等を通して、高い目標を掲げるための材料を提供する。 上記2点を通じて、将来様々な分野でリーダーとなるための資質を育成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 現時点で面談は各クラスとも4回以上実施している。「生徒の心に灯を点ける」という共通意識を持って面談できた。 7月末の「十六夜セミナー」や卒業生との座談会等も通じ、高い目標を掲げる生徒が増えてきた。10月実施の駿台ハイレベル模試受験希望者は、127名であった(昨年150名、一昨年97名)。9月実施の進路希望調査では、東大京大志望者8名、その他の旧帝大志望者33名、医学科志望者14名であった。 	A

平成30年度 重点目標と目標達成のための手立てと評価

A:達成できている B:おおむね達成できている C:達成が不十分である

岡山県立津山高等学校

経営計画番号	重点目標	目標達成のための手立て	中間評価	中間期の達成状況と後半に向けての対応	年度末評価	達成状況と次年度に向けての対応	総合評価	
2 年 次 団	ⅢA1 ⅢA5 Ⅳ2(1)	併設型中高一貫教育校の一員として、また校外のリーダーとして、高いレベルでの知性と社会性を備えた生徒を育てる。	・挨拶、言葉遣い、服装などのマナーを身につけさせ、学校の中心年次生としての自覚を持たせる。 ・授業、学校行事、HR活動、生徒会活動、委員会活動、部活動、十六夜祭など、様々な場面でリーダーシップを磨く機会を多くの生徒に与える。	B	・多くの生徒が挨拶を積極的に行う姿勢が身につくなど、学校の中心年次生としての意識は向上してきた。 ・各種委員会を中心となって行動していることや、十六夜祭での他学年をまとめる経験、さらには1年次生に向けて文理選択の経験を話したり、四校連携講座にて他校の生徒と協力し調査、研究、発表を行うなど、リーダーシップを発揮する場面を多く与えることができ、これらの経験を通じて生徒の成長を感じている。	B	・十六夜祭や各種委員会、部活動、十六夜プロジェクトⅡ発表会、理数科課題研究発表会など、リーダーシップを発揮する場面を多く与えることができた。また四校連携講座でも、他校の生徒と協力して調査研究を進める中でリーダーシップを発揮する場面も見受けられた。これらの経験を通じて、多数の生徒が学校の中心年次生としての自覚を意識してきており、そのことが行動に表れてきている。さらに自覚の向上を促すべく、指導を継続したい。	
	ⅢA4 Ⅳ1(1)	自立型学習者を養成する。	・「予習→授業→復習」の学習サイクルを徹底させ、質・量共に基礎学力の充実を図る。 ・生徒に主体的な学習を促す授業のあり方や課題の与え方について各教科で工夫し、授業研修等を活用して全体で共有する。 ・生活の記録を活用し、生徒に家庭学習の時間と質を自己管理させ、改善と向上に向けて、担任と教科で連携して支援する。	B	・9月実施の学習時間調査による平均学習時間は、平日は190分、休日は267分。6月実施時(平日181分、休日242分)に比べて伸びており、昨年、一昨年の2年次生と比較しても遜色ない。【資料④-1・2】学習の質について、生徒にコメントと自己評価を求めた。多くの生徒が以前に比べて学習の質を向上させつつあると同時に、「まだインプットの勉強が多く、アウトプットが足りない」など、さらに向上させるべき部分を自覚している。【資料④-3】	B	・1月実施の学習時間調査による平均学習時間は、平日199分、休日263分となった。1月調査時、日曜日に理数科生徒の大多数が外部での課題研究発表に参加したことを考慮すると、6月や9月調査に比べて少しずつ伸びたと判断できる。【資料④-1・2】学習の質の自己評価はA B Cの3段階で行っているが、A評価が9月の17%から1月は23%に上昇しており、アウトプットの勉強を意識し実行している生徒の割合が少しずつ増加している。【資料④-3】	B
	ⅢA3 ⅢA4	高い目標を持ち、目標達成のために主体的かつ具体的に行動することのできる生徒を育成する。	・年3回以上の面談や教員からの声かけを通じて、生徒の学習意欲や向上心を喚起する。 ・難関土曜講座を中心に、難関志望者の仲間づくりや学力向上を図る。 ・十六夜プロジェクトⅡや課題研究、学校設定科目を通して、進路志望の具体化や深化を図る。	A	・面談は各クラスとも現時点で、最低3回は実施している。現在は科目選択に向けての面談を実施中である。現時点では少数ではあるが自ら面談を希望する生徒も出てきており、今後も教員から設定した面談だけでなく、生徒が自主的に教員に相談する姿勢を育てていきたい。 ・難関土曜講座には58名が登録し、9月までに8回実施。部活の試合等、特別な用事がある生徒以外はほぼ全員参加している。学校設定科目等の影響もあり、クラスを超えた集団が形成され、またワークショップ等を通じて視野を広げることが勉強へのモチベーションアップにもつながっている。	B	・面談は各クラスとも4回以上実施。課題を抱える生徒については特に面談を重ね、家庭訪問等も実施した。今後は、生徒が自主的に質問や相談に来る姿勢をさらに育てるべく、声掛けを続けていきたい。 ・難関土曜講座は2月までで18講座を実施。学校設定科目での5回のワークショップや、十六夜プロジェクトⅡ、理数科課題研究などを通じて生徒の視野が広がり、今後の進路の方向がより具体的になった生徒も多い。また、これらを通じて生徒同士の人間関係がより広がり、お互いに刺激を受ける関係に成長しつつある。	
3 年 次 団	ⅢA1 Ⅳ1(1)	生徒の思考力・判断力・発信力を醸成し、社会に通用する品格を有した言動ができる人材を育てる。	・日々のSHRや年次団行事を生徒中心で運営させ、生徒が自らの思いや考えを発信できる場面を設定する。 ・挨拶、言葉遣い、服装、時間管理など、社会に出る者として相応しいマナーを身につけさせる。	B	・SHRで生徒が連絡事項やスピーチを行う場面を全クラスで設けており、連帯感のあるクラス運営を行っている。 ・十六夜祭の模擬店の運営を各クラスとも工夫して行った。外部業者との折衝などを通して、身近でない人とのコミュニケーションの仕方を学ぶことができた。 ・一部の生徒に遅刻をしたり、提出物の期限が遅れたりといった時間管理の甘さが見られるため、改善を促したい。	A	・生徒がSHRの運営をしたり、年次集会で自らの思いを語ったりすることを通じて、クラス或いは年次全体の連帯意識を育むことができた。 ・センター試験後も清掃を下級生に任せるのではなく積極的に取り組んだり、周囲に対する気遣いが感じられる言動をする生徒が増えたりと、受験を通じて社会に出る者としての自覚を醸成することができた。	
	ⅢA2 ⅢA3 ⅢC2	自己実現に向けて主体的に、且つ粘り強く質の高い学びを続ける集団を育てる。	・生徒が切磋琢磨しながら授業中心、学校中心の学習ができるような環境づくりを行う。 ・生徒に主体的な学習を促すような授業のあり方や課題の与え方について各教科で工夫し、授業研修等を活用して全体で共有する。	B	・多くの生徒が教科科目を絞ることなく全体的な学力を伸ばそうと努力しており、放課後も自習室を利用して勉強している。生徒の質問の内容についても、自分自身の考えを説明した上で分からない箇所を聞くなど、徐々にレベルが高くなってきつつある。 ・生徒が主体的に勉強できるような課題設定と個別指導を多くの教科科目で行っている。	B	・3年間を通して定期的に自己の学習状況の記録及びその評価をすることによって、多くの生徒に学習の「質」向上を目指す姿勢が定着した。 ・センター試験後も多くの生徒が自習室を利用しており、学校中心の学習スタイルを継続している。 ・各教科でグループ学習やペアワーク等、生徒の自主性や発信力を高める取組を行った。	B
	ⅢA4 ⅢB1 ⅢB2	高い目標を掲げて努力し、自らが選択した進路に自信と誇りを持つ生徒を育成する。	・生徒の人間性や学力の理解に努めて適切な助言を行いつつ、最終的には生徒自らが自己決定できるような指導を行う。 ・様々な問題を抱える生徒に対する適切な指導のあり方について年次団で共有し、自立に向けた支援を行う。	B	・各クラスとも担任を中心に細やかな面談を行い、生徒の状況把握に努めている。担任会等で情報交換を行い、次の面談に活かすことができている。 ・進路に対する不安等から、月当たり延べ数にして155名(6月)→176名(9月)→231名(10月)と欠席者数が増え、年次団と保健室、教育相談室が更に連携を密にして対応する必要がある。	B	・各クラスとも年間を通じて継続的な面談を行い、生徒把握・情報共有に努めたことで、生徒は高い目標を維持して粘り強く努力を継続し【資料⑤-1】、国公立大前期出願者194名(H29年度157名)、中後期出願者は223名(H29年度167名)となった。難関大学については、A0推薦で京大1名、阪大1名、医学科4名が合格し、一般では東大4名、阪大6名、医学科2名が出願している。【資料⑤-2】 ・理想と自身の学力とのギャップに苦しみ、進路に不安を抱える生徒も少なくないが、最後まで諦めずに学び続けて受験を全うさせたい。	